

## 武蔵野日曜集会

## 聖意体现 (二)

## ——ヨハネ伝第6章36～53節——

1994年10月16日

小池辰雄

聖意体现 キリストを食べる 永遠の現在 終の日に甦えらす 絶対次元の中に入る 聖霊に  
圧倒されて 全身で受けとれ 『し・ミゼラブル』

## 【ヨハネ6・36～53】

<sup>35</sup> イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渴くことなからん。<sup>36</sup> 然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。<sup>37</sup> 父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。<sup>38</sup> 夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。<sup>39</sup> 我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらす是なり。<sup>40</sup> わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』

<sup>41</sup> ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言い給いしにより、<sup>42</sup> 呟ひやきて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天より降りし」と言うか』<sup>43</sup> イエス答えて言い給う『なんじら呟ひやき合うな、<sup>44</sup> 我を遣しし父ひき給わずば、誰も我に来るのと能わず、我これを終の日に甦えらすべし。<sup>45</sup> 預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴きて学びし者は我にきたる。<sup>46</sup> これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。<sup>47</sup> 誠に、なんじらに告ぐ、信ずる者は永遠の生命をもつ。<sup>48</sup> 我は生命のパンなり。<sup>49</sup> 汝らの先祖は荒野にてマナを食いしが死にたり。<sup>50</sup> 天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。<sup>51</sup> 我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食べば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』

<sup>52</sup> ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』<sup>53</sup> イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食くらわず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。』



## ●聖意体现

今日は『聖意体现』と題して、ヨハネ伝6章36節からお話します。35節に、

35 イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渴くことなからん。』

とある。こういうところに「なからん」なんていう蓋然性<sup>がいぜん</sup>の気持で訳してあるのは、私は感心しない。「渴くことなし」でいい。

「パンをください」

と言ったら、イエスが言われるのに、

「我は生命のパンである」

と。皆は何かパンでも本当にもらうのかと思つたら、

「私が生命のパンだ」

と仰つた。

「キリストを信ずる」

という言葉が躓きになる。むしろ、キリストを食べなければダメだ。「食べる」というのは、何かを食べれば、普通のものはそれがお腹の足しになるわけだ。栄養になる。そのように霊的に食べなくてはいかん、キリストの生命にあずからなくては。霊的に食べるためには祈入、祈り入ることです。祈つてキリストの中に自分を入れなければダメなんです。

「祈る」というと、何かお願いかと思うけれども、お願いではない。自分自身をキリストの中に入れる。キリストの霊的な生命にあずかる。キリストと一つになる。一如ということ。祈ることはお願いではなく、キリストの中に入ることです。祈り入る、そうして、キリストと一つになると、個々の問題はどこかへ消えてしまう。

個々の問題は、今度はキリストと一つになって祈ると、そこで本当に聞かれている。いつ聞かれるかは知りませんよ。しかし、聞かれているんです。それが実現するのは、直ぐだが、あるいは何日か後か、何年あとか知りません。とにかく、御名にあつて——「御名にあつて」と言うときには「キリストの中で」ということ——祈れば、その祈りは我欲がないから、それが御意を求めているわけです。聖意<sup>みい</sup>を求めている祈りは必ず成つていく。その時の聖意が分からなくても、一向差し支えない。

「御意<sup>みい</sup>を成らせたまえ」

というのは、そういうことです。

「どうぞ、私において聖意が体现するようにしてください」

ということ。自分でもつて努力して体现するのではない。キリストの御意は、神・キリストの力で体现させられる、必ず成る。分量は知らんですよ、質<sup>しつ</sup>的には必ず成る。だから、

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とキリストが言つたのは、そのことです。祈り入れば、それは根源的に聞かれている。直



ぐだか、まだ何日あとだかは知らん。とにかく、聞かれている。聞かれ方は、自分の願いよりももっと凄いい聞かれ方になる。

「さっぱり自分の願いが聞かれていません」

なんて思ったら、そうではない。その願い以上のことが聞かれている。それが「聖意体现」ということです。

### ●キリストを食べる

私たちは毎朝、パンをいただいていますけれども、キリストを食べなくてはいいかん。

「我は生命のパンである。我にきたる者は飢えない。我を受けとる者はいつまでも渴くことがない」

と。こういうところに「信ずる」なんていう言葉があるのが躓きになる。私は「信ずる」という言葉は嫌いだ。「受けとる」でいい。「私を受けとる者は」ということです。体受、身体で受けとる。祈入する。そうすると力がくる。生命がくるし、力が来るし、楽しいし、楽になる。あなた方、そういう祈りをやっているかね。疲れを知らなくなる。眠くはなれども。

「眠る」といえば、私は夢の中で素晴らしい夢を見るね、ほとんど毎晩だ。何でこんなに素晴らしい夢を見るのかと思っている。夢を見ていながら、夢と思わない。思いがけない。1921年に私の長兄小池政美は天界に往ってしまったけれども、そんなのと現実に会うような夢も見る。非常に楽しい。何か不思議でしょうがない。こうやって目覚めている時よりか、夢の中の現実の方がもっと現実なんだ。

「夢の世界は、これは夢ではなかった、これは本当の現だった。目が開いている時

が夢で、現実が夢で、眠っている時の夢が本当の現実だ」

と思うくらいです。

90歳にもなると、

「さて、もうあと地上は何年だろうか」

なんて普通は思うかもしれないが、私は思わない。終りなき生命、永遠の生命ですから。私が地上を去っても、

「小池先生は死んだ」

なんて絶対に言わないでください。

「向こう側に往きました。往生しました。向こう側に旅立ちました」

と言ってくれ。私は死という言葉は嫌いだ。私は死にません。キリストを受けとっている者は死なない。だから、私が向こう側に往った時には、

「万歳！」

と言ってくれ。湿っぽいような葬式なんか要らない。みなで楽しい集会をしてください。



そういう烈々たる世界です。

「私は生命のパンである。私に来る者は飢えず、私を受けとる者はいつまでも

渴かない」

という。飢えず渴かない。こういうことをピシャリと言えるひとだから、イエスというひとは大変なひとだ。だから、頭で読んだら、みな分らない。聖書研究会なんてものはダメなんだ。聖書身読会がいい。研究なんかする必要はひとつもない。『聖書之研究』なんて、内村鑑三があんな雑誌を書くものだから、「研究、研究」と言っている。日蓮の方が偉いよ、「法華経を身読せよ」

と言った。「研究せよ」なんて言いやしない。

### ●永遠の現在

「我は生命のパンなり。我にきたる者は飢えず、渴かず」

これは「渴くことなからん」ではない。

「渴かない、飢えない」

という、全部、現在直説法の言葉です。そういう言葉でなかったら、直説法にしてしまえばいい。聖書以上の読み方をしなければダメなんだ、聖書をギリシヤ語から訳すときに未来形だと未来のような形にするから。未来だって過去だって全部、現在に、現実になる。過去を救い上げる。未来を現在に招き来たらせる。そういう現実が永遠の現実、永遠の現在なんです。過ぎ行かない。すべてのものは過ぎ行くけれども、こういう現在性は過ぎ行かない現在です。常に新たなんです。私の魂はそういう現実でないと承知しない。あなた方はどうだね。

「でも、聖書にはこうあります」

なんて、「聖書にこうある」ではない。聖書以上の世界を、聖書のもう一つ奥をつかむ。キリストが驚いてくださる。それでいいんだ。

「こんな信仰はイスラエルにない」

と聖書に書いてある。我々もそういうイスラエルにない選びの民なんです。我々は選ばれたる者ですよ、選民なんだ。ユダヤ人が選民ではない。キリストを本当に受けとっている者が本当の選民です。あなた方一人びとりが選民です。選ばれた者は人を救うだけの使命がある。人を救いあげる、人を本当の世界に入れてやる使命がある。入れざるを得ない。入らなければ、入らないやつが悪い。こつちが悪いのではない。受けとらない方が悪い。

「こんな素晴らしい世界をあなたは受けとらないのですか。もったいない話ですよ、

永遠の生命がなくていいんですか」

ということですよ。

<sup>36</sup> 然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。<sup>37</sup> 父の我に賜





うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。

「退けず」というのは「棄てない」というもつと強い言葉です。

<sup>38</sup> 夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。

これは非常に力強い言葉ですね。「天より降りしは」なんて言ったものだから、ユダヤ人が「なんだ、おかしいな。あれはナザレのイエスではないか」なんて後でつぶやいている。

### ●終の日に甦えらす

<sup>52</sup> ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』

「肉を食べさせるなんて、どうやってやるのか、死んでしまうではないか」

なんて、そういう馬鹿げたことを52節以下で言っている。全然分かっていない。キリストは説明しませんから、宣言しているだけです。

「聴く耳ある者は聴くべし。受けとる心ある者は受けとるべし」

と、それだけの話です。解釈している世界ではない。受けとる世界です。

<sup>39</sup> 我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。

と。凄いね。世の終りに甦えらせる。御意を体现しないではいられないというんだ。「終の日」とは、イエスやキリストの弟子たちは終末の日は近いことを随分、意識している。もう世の終りは近いことを意識しておられた。二千年たつてもまだ来ないけれども。しかし、我々はいつでも終末に直面しているという現実でなければダメです。今晚でも明日でもいい。世界はひっくり返って新天新地に行ってしまうぞと。

聖書の訳がまだるっこかったら、なにも原文なんか読まなくていいから、そのキリストの心を、神さまの心を表現するような創造的な訳を自分で作ったらいいですよ、そういう自分の聖書を。

「私はギリシア語もヘブライ語も知りませんが、自分の聖書を作りました」と。ああ、結構です。聖霊の導きでそれができるよ。それくらいの意気込みでやってくださいよね。

「わが父の御意は、すべて子を見て受けとる者の永遠の生命を得しむる是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし」

と。キリストは神さまの栄光体だからね。

<sup>41</sup> ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言い給いしにより、<sup>42</sup> 呟きて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父



母を知る、何ぞ今「われは天より降れり」と言うか』

と、バカナことを言っているんだ。

43 イエス答えて言い給う『なんじら眩き合うな、44 我を遣しし父ひき給わずば、誰も我に来ること能わず、我これを終の日に甦えらすべし。45 預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴きて学びし者は我にきたる。46 これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。

「ただ神よりの者のみ父を見たり」とはキリスト自身のことだ。「神さまからの者」はキリストだから。

「未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。」

(ヨハネ1・18)

とある。霊的な神さまをキリストは「父」と言っている。人間の肉親の関係で「父」というのは一番抛り所の存在だからね。お父さんのいない人は、お母さんだつていいですよ。私なんかは現実からいうと母だ。私にとって母小池光子は一切でした。父は私の数え歳五つの時に逝ってしまったから、私はほとんど父を知らない。私の母の恩は海よりも深く山よりも高いと言ってもいいくらいです。

### ●絶対次元の中に入る

キリストの言葉は、棄身で自分をキリストの中へ入れないことには、本当は受けとれない。それと対立していたのでは。その中に入ってしまったわけなければ。対立しているうちはダメです、その中に入ってしまったくないと。

47 誠に誠に、なんじらに告ぐ、信する者は永遠の生命をもつ。48 我は生命のパンなり。49 汝らの先祖は荒野にてマナを食いが死にたり。50 天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。51 我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』

52 ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』53 イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。

なんて、キリストは凄いことを言うからね。

「私の中に入って、私の生命にあずかなければ、生命はない」

と。まあ、大変なひとだね、ケタが違う。次元が違うんだ、絶対次元の世界だから。だから、絶対次元の中に入らなければ。「自分の信仰」なんて、そんなものは棄てなさい。

「何もありません。私はただキリストの中に入るだけです」



と。それでいい。

「私の信仰はまだ薄いから…」

なんて、自分の信仰なんかを顧みる必要はない。

「信なき我をあわれみたまえ」

という言葉がある。あれでいいんだ。

「あなたの中に入ります」

と言う。

「私はお前をつかまえているぞ。どこへ行つたつて逃げられないぞ」

と、そういうキリストの追跡だから。私は今、異言が出そうなんです、抑えていますけれども。今、本当は普通の言葉で話したくない。

教会の牧師さんや何かが、もつともらしいことをしゃべつたつてしようがない。武蔵野のあなた方はさいわいだよ、私みたいな言葉にもならないような言葉を、

「これが本当の福音の現実だ」

ということを知っているのは。

「よし、キリストを食べるぞ」

と。みなこれは、そういう表現で言うことは、素晴らしい霊的な現実のことです。祈り入って全身が熱くなる。そうしたら、キリストを食べていることになる。そういう祈りを——沈黙の祈りでいい、沈黙の雄叫びという——沈黙の雄叫びの祈りをする。あるいは、沈黙の讃美歌だ。御名を讃える。好きな讃美歌をよく歌いなさいよ、声を出さなくてもいいから。私は自分で讃美歌を作らざるを得なかった。あまり好きな讃美歌が少ないものだから。

<sup>53</sup> イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わす、

その血を飲まずば、汝らに生命なし。

だつてさ。凄いな、キリストの言葉は。

「私を食べ、私を飲まなければ、生命はないぞ」

と。こういう言葉をいい加減に読んでいたらダメなんです。

「どういう意味でしょうか？」

ではないよ。意味ではないんだ、現実だから。……私は今、異言が出そうで困っている。

● 聖霊に圧倒されて

今日は「パン」という言葉が大分出ているけれども、「御意を行う」という38節が大事です。

<sup>38</sup> 夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の

御意をなさん為なり。

だから、

「キリストは無者である」



と言っている。自分は何者でもない。そして、神一切である。

「我は何者でもない」

と仰っている。なにさま、キリストの言葉は凄い。全身でキリストの言葉の中に入っていないかなければね。註解書も何も要らん。本当は説明なんかできることではないんだから。

<sup>47</sup> 誠に誠に、なんじらに告ぐ、信ずる者は永遠の生命をもつ。

「信ずる」という言葉は私は嫌いだ。「受けとる者は」ということです。「本ものとする者は」でもいい。どうも、「信ずる」とか「信仰」という言葉が躓きになる。

「まだ私の信仰は…」

なんて、自分の信仰を私して自分のものを考えて顧みている。大体のクリスチャンがそうなんだ。「まだ私の信仰は…」もヘツタクレもない。

「信仰なんか棄てろ」

と言いたい。キリストに圧倒されるだけです。

「信仰なんか何もありません。キリストの力、光、生命に圧倒されて生きています」

というわけです。圧倒というのは面白い言葉だな。倒される。上から抑圧されてひっくり返る。ひっくり返されて生きている。パウロは正に圧倒されているんだ。聖霊に圧倒されて起き上がった。

「我が目より鱗の如きもの落ちたり」

と言う。

### ● 全身で受けとれ

十字架と聖霊です。キリストの十字架の贖いを全身で受けとると、そして祈り入ると聖霊がやってくる。十字架の土台がなければダメですよ。我々のために生命を棄てて、自我というものをすつ飛ばしてくださったのが十字架ですから。我々の生まれつきの自我をすつ飛ばしたのが十字架の贖罪ということ。「罪」というのは「自我」ですから。罪というのは、何か悪い事をしたり悪いことを思ったりすることを罪だと思うけれども、そうではない。自我心が罪なんです。それが十字架ですつ飛ばされました。

「もう、お前の自我心はみな私が贖ってしまったから、自分なんか顧みる必要はない。ただ、来なさい。あるがままで来なさい」

と。そして、キリストの中に入っていく。無条件に入れる。今、自分の状態がどうだこうだなんてことは問題ではない。

「もう少し聖書の勉強をしてから。もう少し祈ってから」

なんていう、いろいろな条件はひとつも要らない。あるがまま、そのままキリストの中へ入っていく。

<sup>47</sup> 誠に誠に、なんじらに告ぐ、信ずる者は永遠の生命をもつ。





「受けとる者は永遠の生命をもつ」

ということ。「全身で受けとれ」ということ。あなた方は私の気持が分かるでしょ、なるほど一般に言われる「信ずる」という言葉はまだるっこくてしょうがないということが。もし、信ずると言う言葉を使いたければ、「信受」だね、信じ受けとる。しかし、やはり本当は信受よりも、全身で受けとる「体受」の方がいい。身体からだで受けとる。

「法華経を身体で読め」

と日蓮が言った。さすがは日蓮だ。身読しんどくせよ、からだで読めと言った。やはり、本ものの世界はそうなんだ。法然、親鸞、日蓮、そこらの坊さんは素晴らしい。一遍上人も凄い。一遍は捨聖すてひじりともいう。本当に棄身なんだ。

## ●『レ・ミゼラブル』

私はヴィクトル・ユゴー（1802～1885）の『レ・ミゼラブル』を読んだ。『レ・ミゼラブル』はフランス文学の散文では最高のものだそうですね。確かに素晴らしい内容です。もちろん前に読んだことがありますけれども、今度読んでまた非常に感激しました。人生問題をあらゆる角度からとり扱っている。非常に広汎こうはんにして深刻な内容です。

その序文に、

「法律と風習とによつて或る社会的処罰が存在し、それが人為的に文明社会の中に地獄をつくり、更に世間的不幸によつて神聖な人間の運命を紛糾させている限り、下層階級なるがゆえの男の失格、飢えによる女の墮落、日の目を見ないことによる子供の萎縮、それら三つの問題が解決されない限り、つまり或る方面において社会的窒息が生ずる可能性のある限り、言葉を代えて言えば、また広い見解をすれば、地上に無知と悲惨とがある限り、本書のよつな書物もおそらく無益ではないであらう。」

と謙遜に書いていますが、これは1862年の元日に書いた言葉です。私はまた新しく撃たれて読みました。これは是非、一遍お読みになるといい。

彼はいわゆる狭いキリスト教は嫌いなんだ。本当の人間のあるがままの世界を深くまた広く見ていた人だ。素晴らしいね、ユゴーという人は。ジャンバルジャンは可哀相な人、弱い人を心からの本当の同情をもつて——単なる同情ではない——助けている。この中に出てくるコゼットという非常に可憐な少女がいます。あの少女は素晴らしい。宿屋の悪い夫婦に虐待された。それをジャンバルジャンが救い出してやった。もともと彼自身は盗賊みたいなやつだったけれども、それが大変な人に変えられた。『レ・ミゼラブル』というのは素晴らしいね、フランス文学の最高だ。ドイツ文学でもあれにかなうのはないのではないかな。ヨーロッパの散文の文学では『レ・ミゼラブル』が最高ではないかな。トルストイの『復活』もあれにはかなわないね。

